

体育種目選択の現状と課題

ーN 高等学校の事例からー

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 辻弘嗣

1.はじめに

中央教育審議会答申において高等学校「体育」の考え方は、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続し、スポーツとの多様な関わり方を状況に応じて選択し、卒業後も継続して実践することができるよう『知識・技能』『思考力・判断力・表現力等』『学びに向かう力・人間性等』の育成を重視する観点から内容等の改善を図るとされた。このことを踏まえ近年では、生涯スポーツとして結びつく体育の授業として、体育種目選択制授業が注目を浴びている。

坪井によると体育種目選択制授業は、1980年に導入されたとされた。導入当初の狙いは、「自由で楽しい体育授業の実現」であったと述べられている。松本、福本、堤、井口によるとその後、文部科学省の「スポーツ立国戦略」の重点戦略の中に「ライフステージに応じたスポーツ機会の創造」があり、その目標の1つとして「豊かなスポーツを実現する基礎となる学校体育・運動部活動の実現を図る」と掲げられている。その実現のために、方策の1つとして、学習者全員が共通のゴールを目指して同じように活動するこれまでの学習指導のあり方から、多様化する学習者1人1人の特性に対応できる学習への変化により、全国の90%以上の学校で選択制授業が実施されている。実施方法としては、井口によると、学習内容として用意された複数の運動を、生徒が選択できるように計画された授業であり、学習する運動を生徒が自ら選択を行う生徒選択が基本である。生涯スポーツを指向する学校においては、この生徒の選択に基づく授業の充実を図る必要があり、生徒が選択するという

行為を学習内に明確に位置付けることによって、生徒1人1人の自発的、自主的な運動への取り組みを引き出すことや、体育の考え方の実現に寄与するとされている。

体育選択制授業が実践される要因としては、城長、井口によると、単に好きな種目を選択できるだけでなく、個人の能力、適性にあった種目を自分の意思で選択することで、「選択した」という責任のもとに、学習者の学習活動が自主的、主体的に展開されることの動機づけになる。また、学習者の運動に対しての意味や価値の捉え方の違いに対して対応できること、学習者の多様な興味・関心に応じて発達・自主・自立的な学習を促進することができるとともに、単元規模の工夫などにより、学習者の個性をさらに伸ばすことが期待できることであると述べられている。さらに、学習者は、種目選択制授業を通して、自らの力にふさわしい課題や挑戦の仕方を選択し、練習の仕方などの工夫する力を身につけ、自発的・自主的な学習へと発展させていくことができるからである。

体育選択制授業を行う上での問題点として、城長、井口によると、選択させるにしても、それぞれの種目の基本的技術、ルール、練習法を一通り学習させる必要がある。また、選択制授業によって学習者は、楽しい時間を過ごしていることは確かであるが、運動を得意とする学習者の種目選択の体育によって、運動技術を大幅に伸ばすという点、また、運動嫌いの学習者のその運動を楽しむための水準まで高めるところまで至っていないという点が問題として挙げられる。

体育選択制授業を行う上での留意事項とし

て、井口によると、選択制授業は、言うまでもなく生徒が自己の特性に応じて運動領域や、運動種目を選んで授業に取り組むことである。したがって、学習指導を進めるにあたっては、このことを踏まえて工夫していくことが求められる。また、選択した運動種目を超えて、選択制授業の意図や狙いを、学習の見通しとともに生徒に理解させることである。さらに、学習者が自らの課題を明確に持ち、学習の場を主体的に選んで学習を進めることが大切であり、学習者の多様な特性に対応できるよう豊かな学習環境を用意する必要があると述べられている。

2,体育種目選択制授業の種類について

種目選択については、いくつかの種類があるが、あらかじめ学校側の用意した範囲内から、学習者が選択を行うことが実際である。種類について井口は、以下のように大別することができる。

・種目内選択

例えば、水泳の種目の中で、クロール、平泳ぎなどの複数の泳法から、学習者が選択して学習を進める選択方法である。

・領域内選択

球技の領域内で、ソフトボール、サッカーなどの複数の種目から学習者が種目を選択して学習を進める選択方法である。

・領域間選択

球技、陸上競技など異なる複数ノ領域より、学習者が種目を選択して学習を進める選択方法である

・広領域選択

学習指導要領に示されているようなスキーやスケートなど地域や学校の特性などを考慮し、学習指導要領に例示されていない種目も含めた幅広い領域の中より学習者が種目を選択して学習を進める選択方法である。

・コース選択

指導者が複数の種目を組み合わせたコースを作成し、そのコースを学習者が選択し、学習を進める選択方法である。

3,研究の目的

本研究では、某高等学校の3年次を対象に質問紙調査を実施することにより、実際に体育種目選択制授業を受講している生徒が、どのように種目選択を行なっているのか、どのようなことを不満に思っているのか、などの体育種目選択制授業の現状と課題について明確化することを目的とした。

4,研究の仮説

種目選択制授業において授業方法の導入の要因となった生涯スポーツの基礎を培うなどの目的は考えておらず、選択の理由が友人や成績などを目的になってしまっているのではないかと。

5,調査方法

・調査日

令和5年11月21,22,24日に実施した。

・調査対象

山梨県甲府市内某高等学校に所属する第3学年211名

・調査方法

質問紙調査

・選択制の種類

領域内選択の選択方法を活用

・調査の限界

学習指導要領では、種目選択の方法について入学年次に、「器械運動」「陸上競技」「水泳」「球技」「武道」「ダンス」の中から、3または4領域を選択できることとし、次年度以降、「器械運動」「陸上競技」「水泳」「武道」「ダンス」の中から、2から4領域を選択させることとされているが、調査を実施した高等学校の選択制の種類が「領域内選択」であり、実施されていた内容が球技であったため、球技のみの種目選択の現状と課題のみの調査とする。

6.結果と考察

本研究の質問紙調査は、「体育の授業で種目を選択する前」「体育の授業で種目選択を行ってから」の2つの場面に分け予備調査及び本調査を行なった。

本調査と予備調査ともに211名の回答を集めることができた。

・予備調査

1つ目の「体を動かすことが好きですか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は80.1% (169名)、「いいえ」と回答した学習者は19.9%(42名)であった。このことから、学習者の集団は、体を動かすことに対して前向きな考えを持っている集団であることがわかった。また、2つ目の「部活動に所属していましたか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は74.9% (158名)、「いいえ」と回答した学習者は、25.1%(53名)であった。さらに、前述の問いにおいて、「はい」と回答した学習者の中で、3つ目の「部活動は、運動部活動に所属していましたか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は74.1% (117名)、「いいえ」と回答した学習者は25.9% (41名)であった。以上のことから学習者の集団は、部活動という形で日常的に運動を行なっている者が約半数にあたる117名であり、体を動かすことに対して、前向きな考えを持っていることがわかった。また、特定の種目に対して継続的に運動を行うことに対しても前向きな考えを持っていることが考察できる。

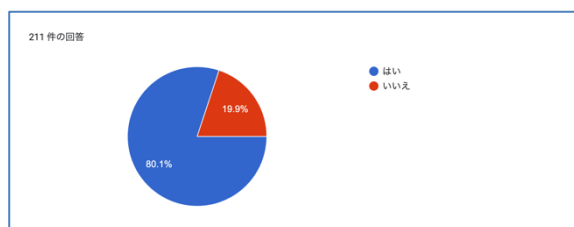


図1 体を動かすことは好きですか

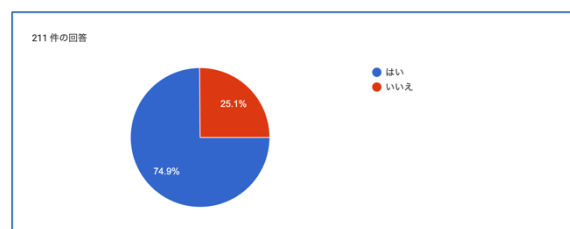


図2 部活動に所属していますか

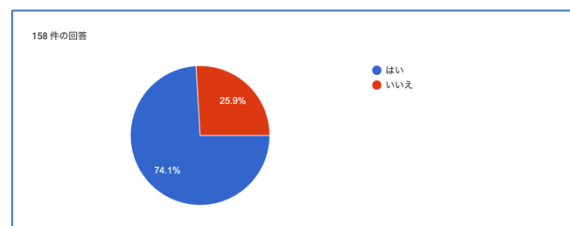


図3 部活動は運動部に所属していますか

また、4つ目の「学校以外の日常で運動はしますか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は55% (116名)、「いいえ」と回答した学習者は45% (95名)であった。このことから、全体の半数以上の学習者が学校以外の場面でも、何らかの運動を行なっていることがわかった。

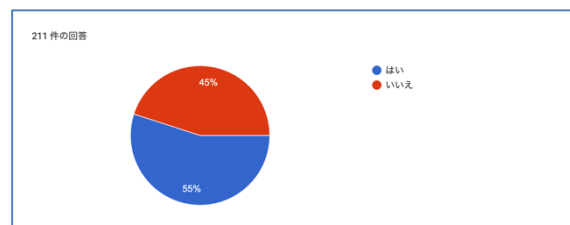


図4 学校以外日常で運動はしますか

・本調査

○体育の種目選択を行う前の場面について

1つ目の「体育の授業内で行なってみたい種目はありますか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は84.8% (179名)、「いいえ」と回答した学習者は、15.2% (32名)であった。2つ目の「体育で自分の経験のある種目を選択したいと思いますか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は81.5% (172名)、「いいえ」と回答した学習者は

18.5% (39名) であった。経験した種目を選択したいと考える要因として、3つ目の「選択を決定した理由はどのようなことですか」という自由記述に対して、「できる」や「行える」、「得意」「好き」、「楽しめる」などの自分ができる種目だからという理由で、選択を決定する学習者は、全体の約半数にあたる110名であった。回答結果から分かるように、学習者は新しいことに挑戦するよりも自分の経験のある種目や、できる種目でしか楽しさを見出すことができないのではないかと考察する。立木が述べているように、「体育種目選択は、生涯にわたって自分の得意とするスポーツ、好きなスポーツを学生時代に習得しておき、学習者の個人差に応じてその運動から得られる楽しさや喜びの質を高め、楽しみ方を身につけることが選択制授業では要求される」という面では、選択制授業は効果的に活用できているように思えるが、城長が指摘するように、「好きな種目だけ行わせていいのだろうか」という問題が残る。4つ目の「体育の種目を選ぶことについてどのように思いますか」という自由記述に対して、「良い」などの肯定的な意見が169名と大半を占めている。しかし、「良い」と思う理由について、「成績が良くなるから」や「苦手なものを嫌々行わなくて済む」などの意見も多くみられた。このようなことから、井口が指摘するように、「運動種目を生徒が選択し、実践する授業は、運動嫌いや運動離れを抑制するように思えたが現在も二極化が進んでいる」という考え方もあるが、選択の方法や幅の変化によって二極化の抑制につながるのではないかと思った。また、学習者の「成績が良くなるから」等については越川、長見、鈴木が述べている、「技能向上などの現在の意義だけにとどまり、生涯にわたって運動を楽しむ能力や態度を身につけるなどの将来的意義」には到達できないのではないかと考察した。5つ目の「選択制授業の内容について事前に知っていましたか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は73% (155名)、「いいえ」と回答した学習者は26.5% (56名)

であった。「はい」と回答した生徒の選択制授業の内容を事前に知った経緯について、6つ目の「どのように知りましたか」という質問に対する回答は、「友人から」が47名、「教師から」が24名であり、「前回と同じ内容」や「傾向から」と回答した学習者は20名であった。また、選択制授業の内容について、事前に知っていましたかの質問について「いいえ」と回答した学習者に対して、「種目選択の内容について知りたかったですか」という質問に対して「はい」と回答した学習者は73.2% (41名)、「いいえ」と回答した学習者は、26.8% (15名)であった。

また、7つ目の「選択する種目について事前に調べたり聞いたりしましたか」という質問に対して、「いいえ」など何もしていない学習者が141名と3分の2を占めている。さらに、8つ目の「選択した種目はいつ決めましたか」という質問に対して、「授業の当日その場で決める」と回答した学習者は、152名であった。そして、9つ目の「体育の種目選択内にあったらよかったと思う種目は何か」の自由記述の上位の回答として、「球技」と回答した学習者は、35名、「地域の特色が関係する種目」と回答した学習者は30名、「学校が毎年決定して行うものではない種目を行いたい」と回答した学習者は、37名であった。学習指導要領の内容及び内容の取り扱いについてでは、「地域や学校の実態及び生徒の特性や選択履修の状況等を踏まえるとともに、安全を十分確保した上で、生徒が自由に選択して履修することができるよう配慮するものとする。」とされているが、学習者の回答から、地域の特性を踏まえた種目が選択肢にないことが考えられる。また、城長によると種目選択制授業では、「事前に予備調査を行い、学習者はどのような種目を望んでいるのか調べ、希望の多い種目をいくつか学校の施設、用具や教師の指導面などの条件と照らし合わせながら設定を行うことが望ましい」と述べている。しかし、調査結果から分かったこととして、「生徒の意見を聞く」ということはなく、指導者から指定さ

れた種目を、その場で選択していることがわかった。このことから、学習者は、選択に対する「諦め」が生まれてしまい、その結果、本来の種目選択の意図を学習者が理解できなくなっているのではないかと考える。
○体育の授業で種目選択を行なってからについて

1つ目の「体育の授業は楽しいですか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は、86.7%(83名)、「いいえ」と回答した学習者は、13.3%(28名)であった。このことから、学習者のほとんどが、体育の授業内に何らかの楽しみを得られていることがわかった。

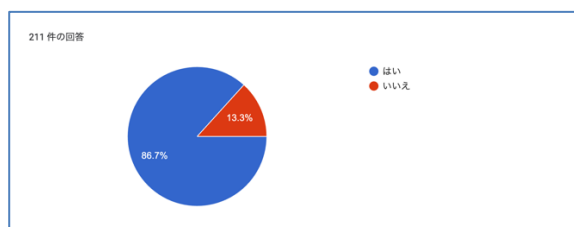


図5 体育の授業は楽しいですか

また、2つ目の「小学生の体育の授業と比較して高校の体育の授業は楽しいですか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は、79.6%(168名)、「いいえ」と回答した学習者は、20.4%(43名)であった。また、3つ目の「中学生の体育の授業と比較して高等学校の体育の授業は楽しいですか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は、80.1%(169名)、「いいえ」と回答した学習者は、19.9%(42名)であった。小学校と中学校の体育の授業と、高等学校の体育の授業で楽しさを比較すると、小学校と中学校共に「楽しい」と感じている学習者の数は低下していることがわかった。このことから、体育の授業方法の変化が、体育の「楽しさ」の減少の要因なのではないかと考えた。また、自ら選択を行わなければならなくなったことで、井口が指摘するように、君子危うきに近寄らずのような考え方を持ってしまった生徒は、「あれもできない」「これもできない」などの諦めの選択を行な

ったり、消去法で選択を行なってしまったことで体育の楽しさの減少につながったのではないかと考えた。

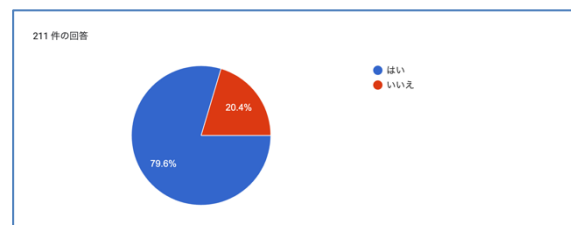


図6 小学校の体育の授業と比較して高等学校の体育の授業は楽しいですか

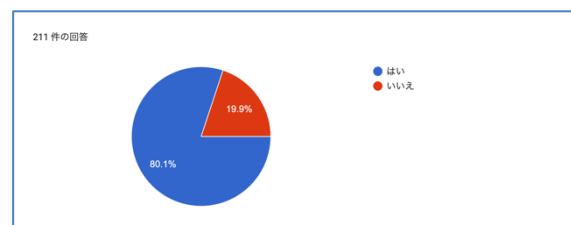


図7 中学校の体育と比較して高等学校の体育の授業は楽しいですか

4つ目の「種目選択はどのようなことを考えて選択したら良いと思いますか」という自由記述に対し、上位の回答として、「得意不得意」や「その競技を自分ができるか」等を回答した学習者は、80名、「成績」と回答した学習者は、19名、「興味関心」や「好奇心」などを回答した学習者は、68名、「一緒に授業を行うメンバー」等を回答した学習者は、10名であった。この結果から、直接「成績」と記入した学習者は、19名と少数であったが、「得意不得意」「自分ができるか」など間接的に成績に繋がる回答が80名であり、選択する上で考えることとして、学習者は、「好奇心」や「楽しさ」より「成績」を重視する傾向があるのではないかと考えた。

5つ目の「選択した種目以外で行いたい種目はありますか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は、57.3%(121名)、「いいえ」と回答した学習者は、42.7%(90名)であった。この結果から、半数以上の生徒が、現在行

われている種目選択以外の種目を選択したいと考えていることがわかった。

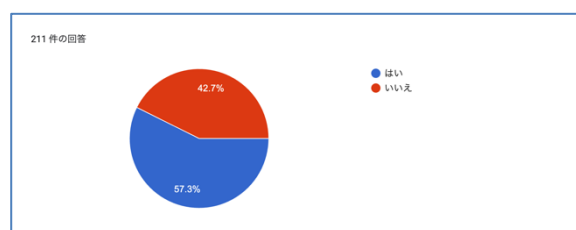


図 8 選択した種目以外で行いたい種目はありますか

6つ目の「種目選択は自分の希望通りでしたか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は、77.3%（163名）、「いいえ」と回答した学習者は、22.7%（48名）であった。この結果から、半数以上の学習者は、希望通りの選択が行えているが、残りの学習者は、何らかの要因により思い通りの選択ができていないことがわかった。

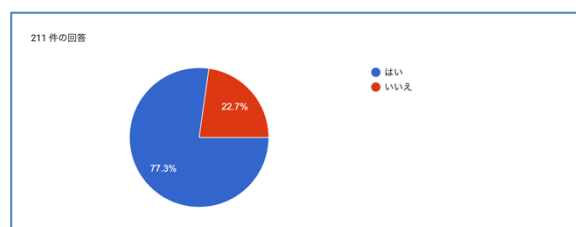


図 9 種目選択は自分の希望通りでしたか

しかし、6つ目の質問を「いいえ」と回答した学習者に対して、付随する質問として7つ目の「選択した種目に楽しさを見出せましたか」という、「はい」と回答した学習者は79.2%（38名）、「いいえ」と回答した学習者は、20.8%（10名）であった。この結果から、ほとんどの学習者は、思い通りの選択ができなくてもその種目に対して楽しさを見出すことができることがわかった。8つ目の「高等学校卒業後選択した種目を行いたいと思いますか」という質問に対して、「はい」と回答した学習者は、64.9%（137名）、「いいえ」と回答した学習者は35.1%（74名）であった。

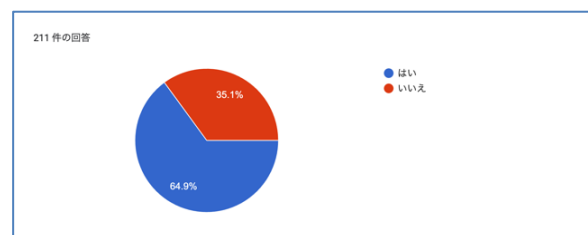


図 10 高等学校卒業後も選択した種目を行いたいと思いますか

また、9つ目に「高等学校卒業後行ってみたい種目はありますか」の自由記述について上位の回答で「球技」の種類を回答した学習者が122名、「水泳」7名、「ダンス」7名であった。この結果から、種目選択制の授業が生涯スポーツの意欲につながっていることがわかった。

7.まとめ

体育の種目選択制の現状について、学習者の目線から調査を行った。それにより、実習校の体育の種目選択の現状と課題が明らかになった。この結果から、生涯スポーツなど体育の目的は考えておらず、選択理由が成績など個人に偏ってしまっていることがわかった。しかし、学習者が体育の目的を意識していなくても、結果として、体育で行っていた種目を高等学校卒業後も行いたいと思う学習者が、3分の1以上であったことから、目的を意識させなくても、学習者は選択肢の中から選んだ種目で楽しさを見出し、それを生涯スポーツに繋げることができるのではないかと思った。

種目の選択については、学習者は、球技以外の種目も多々挙げていた。このことから、学習者のニーズは球技以外にもあり、このニーズに応える指導者側の体制を再構築することが必要になると考える。また、消去法や諦めの選択になってしまう生徒への対応も、必要になってくると考える。

また、種目の決定については、あらかじめ学校側が用意した範囲の中から選択を行う方法を活用しているが、実際に体育の目的を達成させるためには、種目選択の方法を見直すこ

とが必要であると考え。この方法として、予備調査や、あらかじめスポーツの種類について調べる学習等を活用しながら、沢山の種類のスポーツに興味を持ってもらうことが重要であり、指導者は、それに対応できる知識と技能を習得する必要があると考える。

この種目選択制の授業は、現代の多様化する学生に対して、将来の可能性を生み出したり、生涯のスポーツライフの構築ためには重要な授業方法であり、これを実現させるためには、種目を決める方法等について検討していかなければならない。

8.最後に

本研究は、実習校のみの研究であり、エビデンスが低い研究である。そのため、研究の信憑性に欠ける部分がある。そのため、他の研究の参考にしていただけたら幸いである。

引用参考文献

- ・文部科学省（2018）高等学校学習指導要領
https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf
（参照日 2024 年 1 月 20 日）
- ・文部科学省（2018）高等学校学習指導要領解説保健体育編
https://www.mext.go.jp/content/1407073_07_1_2.pdf（参照日 2024 年 1 月 20 日）
- ・城長眞治（1984）「選択制カリキュラムの拡大と体育授業-本校の体育授業実践報告-」スポーツ教育学研究 第3巻
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjses1982/3/2/3_2_79/pdf-char/ja
（参照日 2024 年 1 月 20 日）
- ・松岡重信，山下理子，沖原謙（1994）「わが国における『生涯スポーツ』概念の実情と学校体育との関連について（Ⅱ）-体育科教科課程研究の鮮明化の視点より-」日本教科教育学会誌 第16巻 第4号
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcrdajp/16/4/16_KJ00006854219/pdf-char/ja
（参照日 2024 年 1 月 20 日）

- ・井口成明（2006）「東京大学教育学部附属中等教育学校における体育授業の試み 生徒が学びあう体育授業の創造」

https://www.waseda.jp/sports/supoken/research/2006_1/5006A304.pdf

（参照日 2024 年 1 月 20 日）

- ・大塚正美（2011）「体育の歴史と役割」 城西国際大学

<http://jupiter2.jiu.ac.jp/books/bulletin/2010/info/otsuka.pdf>

（参照日 2024 年 1 月 20 日）

- ・立木正（1996）「小学校体育における選択制授業導入に関する研究：東京都の中学校保健体育科教師の意識調査から」

<https://core.ac.uk/download/pdf/15918344.pdf>

（参照日 2024 年 1 月 20 日）

- ・松岡重信（1991）「生涯スポーツと学校体育の関係について」 中国四国教育学会

file:///Users/tsujikoji/Downloads/AnnEducRes_36-2_381.pdf

（参照日 2024 年 1 月 20 日）

- ・坪井恭紀（2022）「高等学校におけるより望ましい体育選択制授業を探る -卒業生対象の質問紙調査から見えてくるもの-」 一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jspehssc/72/0/72_370/pdf-char/ja

（参照日 2024 年 1 月 20 日）

- ・越川茂樹，長見真，鈴木秀人（1992）「日本の教科体育における「選択制授業」に関する研究 -「選択制授業」が有する意義の検討を中心に」 日本体育学会

https://web.archive.org/web/20220331105924id/https://www.jstage.jst.go.jp/article/jspehconf/43B/0/43B_881/pdf

（参照日 2024 年 1 月 20 日）

- ・松本究，福本敏雄，堤公一（2013）「生徒の楽しみ方に対応した球技選択制授業の有効性 -高等学校バスケットボール授業において-」佐賀大学教育学研究 第30号
matsumoto_201403.pdf

(参照日 2024 年 1 月 20 日)

・松永淳一 (1995) 「高等学校における選択制
授業の研究」 長崎大学教育学部教科教育学
研究報告 第 25 号

[file:///Users/tsujikoji/Downloads/kyoikuK
K00_25_06.pdf](file:///Users/tsujikoji/Downloads/kyoikuK00_25_06.pdf)

(参照日 2024 年 1 月 20 日)